

コ - テン

の

自然観

(かたや σ にれた論文の idea
と σ 1 得る)

序 言

コーランには様々な問題が論じられてい
 いる。或いは様々な問題について啓示が下され
 ている。そのなかで自然がどのようにみられ
 ているかを追究することが本論文の目的であ
 る。~~そのように例としてコーランの自然観を~~

~~問題~~。イスラーム文化はコーランとその
 出発点と下る。これが後のイスラームの哲学
 と科学の礎となるのである。この意味でコ
 ーランはイスラームの哲学思想、科学思想の
 源泉であり、コーラン中に見出される自然観
 はイスラーム哲学、科学の自然観の骨子とな
 るものである。

(この要旨は凡てが不正確である。徹頭徹尾人間とエホバ
 のかけがれが下とされている。エホバの人間化と陸する。)

旧約聖書には自然に関する記述が極めて乏
 しい。創世記や出エジプト記で天地創造や紅
 海が二つに割れた様子が描かれてい^てるが、大体
 その程度で、もっぱらイスラエル民族と神エ
 ホバとの関係に記述がしぼられている。エホ

バはイスラエル民族を愛し、イスラエル民族もエホバを尊ぶと云うのが理想なのであるが、イスラエル民族の、エホバへの態度が、実に

「加~~減~~で、ややもすればエホバを忘れて他の神々を拜したりする。これに対してエホバが懲罰を下し給い、イスラエル民族に不幸がおとすれ、そのあまりのつらさに泣~~泣~~き叫ぶと、エホバは哀れにほって罪を許し給い、イスラエル民族も更生を誓う。そしてまたエホバを忘れて不幸が舞うと云うくり返したのである。旧約聖書を一巻して流れてくるのは「イスラエル民族中心主義」⇒と名付け得る態措である。ここでは人間はイスラエル民族に属するが、属する「子」でも~~子~~の民族に役立つか~~か~~なくとも友好関係にたつてくる)隙りに於て生存を許されるのであって、それ以外は^(の民族)一顧だに与えられない。神エホバはその~~子~~^{民族}に与つての~~神~~ではな^神いのである。神エホバは徹底的にイスラエル民族の利益のみを固く存任である。云々としたイスラエル民族の繁栄が最も

大 功 能 ~~は~~ ^{こ と が さ に 向 っ て} ~~こ と が さ に 向 っ て~~ 工 ホ バ は ぞ け と 実
 現 可 行 性 の 道 具 と し て 描 か れ て い る 。 工 ホ
 バ は イ ス ラ エ ル 民 族 に 吐 き ず り ま わ さ れ て い
 る と い っ て も 過 言 で は な い 。 イ ス ラ エ ル 民 族
 に と っ て 好 都 合 民 族 が 善 き 民 族 と さ れ 、 不
 都 合 民 族 は 悪 き 民 族 と さ れ る 。 イ ス ラ エ ル
 民 族 を 世 界 の 中 心 に 有 せ て 強 引 に 世 界 の 在 り
 方 を 規 定 し せ う と す る 。 徹 底 し た 民 族 宗 教 だ
 り 。 工 ホ バ は 氏 神 だ の だ り 。 こ の 特 別 な
 民 族 と 氏 神 工 ホ バ と の 結 び つ き は 両 者 の 契
 約 を 通 じ て 行 な わ れ る 。 工 ホ バ を 己 己 の 神 と
 して 扱 っ て 見 返 り に 、 イ ス ラ エ ル 民 族 を 己
 己 の 民 族 ^(民) と し て 祭 祭 ^{と して 扱 っ て} ~~と~~ ^{こ れ が} ~~こ~~ ^こ ~~れ~~ ^の 契 約 の
 骨 子 だ り 。 こ の 契 約 の 骨 子 に 工 ホ バ と
 イ ス ラ エ ル 民 族 が 結 ば れ っ て 己 己 の 民 族 の 神 だ り
 だ り 。 己 己 の 民 族 と 結 ば れ っ て い る 。 し かし イ ス ラ エ ル
 民 族 は 一 つ の 契 約 を 結 ぶ 、 他 の 神 々 の
 後 を 慕 っ て 居 る 。 工 ホ バ は 決 して 最 終 的
 に こ の 民 族 を 見 捨 て る と い っ て も 可 能 だ り 。

イ ス ラ エ ル 民 族 間 に 所 有 権 は 不 平 等 契 約 の 一 つ と

きとも存してゐる。この契約に於ては工
 ホバは常にこの民族の下手に立ってゐて、この
 民族が主としてゐるからである。ともあ
 らぬ無言のうちに絶対的民族中心主義である
 。旧約の世界で描かれてゐるこの民族は或る
 意味では弱々しいが（常に不安定で罪にほし
 り易い）、^別の意味では強者と云へる。工ホ
 バと（不平等な、自分達に有利な）契約を結
 び得るからである。如何に弱（2）しくとも存にも
 のかと契約を結び得るといふことは大變存
 とである。契約はその当事者の自主性を前提
 とする。契約といふものは①互いに相手と
 選んでゐること、②また契約を結ぶ自由な
 し、結ばない自由があることと暗黙の前提と
 がある。工ホバと契約を結ばない在り方もこの
 民族にとつて可能であることを意味するので
 ある（勿論^{に在り}は~~この~~この民族にとつて悲惨と招
 くものではあるけれども）。後に述べるけれども
 も、これはイスラエルの神と人間との関係に

換言すれば、一方に神がいて、^(別a-3E) 又それは全く没交渉の人間存在ものがある、両者が契結した「確った」……
 ……おぼえては絶対にある…とする。 (5)

一方では、神ときり離された人間~~の~~在り方など…そのものはそれぞれあり得る…とする。
 人間は神の奴隷 (عبر: アブド) としてそもそもその初めにありつづいた。人間~~は~~^{として}生きてくる限り、一瞬のときれもなく奴隷として在り続けるのである。従って神と人間とが契結を結ぶ…その考え方は… (①) コーランのなかで旧約の契結思想について、これを肯定するものがあるにはある。しかしそれは神と人間との契結を^{問題として}正面からとりあげて…そのなかでは、コーランの教えは旧約や新約の教えを踏襲するものであると^{精神}から出た…とである)。契結はその関係にある者同志が互いに^(=契結関係にある者)に好して特権的地位を定める性格がある。旧約聖書では、実にイスラエル民族が絶対的に特権的地位を占めるのである。イスラエル民族は神エホバの前に唯一独尊の地位にたつ。他の民族はこれにあがらず、たゞイスラエルに奉仕するのみである。その他の諸動物や草木に…たつて

↓
 がある限り

ある。例えは人類の始祖アダムへの創造に際し
 アツラ一は天使達にアダムに拜する事を命じ
 られた事である。これは人間は本来とるにた
 らないものから創造されたのであるけれども
 他はさぬアツラ一の手によつて創造されたこ
 とに於て尊いのである。天使も是に拜するが
 ごとき存在たり得るのであること。これは似
 とつ人間に於ては是も是の如く、ど
 んなものであれアツラ一の手によつて創造さ
 れたものは全て、ために天使が拜するほど尊
 いものであること、そしてアツラ一が拜する
 よう命じ給うた相手は他の造物ではなく天
 使であったこと。つまり諸動物や草木に人間
 を拜するよき命じられたおらぬこと。アツラ
 一が強調されたことは自分の手によつて成
 ったものは尊いと、それが何であれ
 アツラ一の手によるものは尊いと、
 また存在するものでアツラ一の手によるもの
 のは何も無いのであるから、全て理に存在し
 てゐるもの、何れもアツラ一の手による

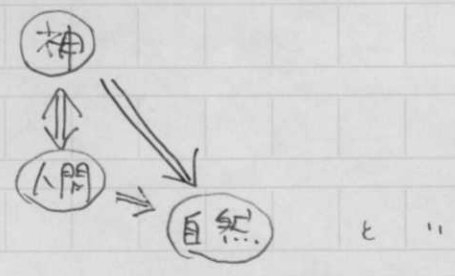
ア

ものとして無条件に (~~たまって~~ 天使 ~~に~~ 降るよ
う命じらるほども) 尊 " こと が 言 わ れ て " 事
と 解 する こと が 出 来 る の で 矛盾 だ け だ ") 。

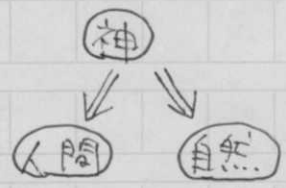
人間 が アッ ラー の 前 に 他 の 自然 物 に く び て
時 刻 を ~~た~~ ^もた ぬ こと を 述 べ て " 事 句 は 非 常 に 沢
山 あり 。 例 之 ば 無 造 作 に 手 近 な 一 句 を 引 用 可
る 存 じ ば 第 40 章 第 57 節 に << 天 と 地 の 創 造 は 人
間 の 創 造 より も 偉 大 な 事 である , 大 部 分 の
人 は 其 の 事 を 知 ら ず 存 " け れ ど も >> と あり
。 コー ラ ン に は " 天 と 地 と " の 表 現 が 心
ば ん に 出 て く る 。 其 の ~~出~~ ^出 て く る 所 々 " 其 の 個
所 の 文 脈 に よ り 微妙 な 差 がある の は 論
論 の 事 である が , 総 じて 自然 一 般 を さ び と
み て 事 " 。 つ ま り 上 の 句 は 人間 の た め に 天 地
が 創 造 さ れ た の 事 " 存 " こと , 人間 の た め に
自然 一 般 が あり の 事 " 存 " こと が 言 わ れ て " 事
る (④ 人間 の 住 ん だ " 事 大地 が あり 之 存
④ " 事 には 尊 し こと して 山 を 置 き , 人間 を 尊 べ ば
め に ~~河~~ ^河川 を つ くら せ ば と 説 じ 得 る 事 存 句 も
あり 。 こと も 例 之 ば " 河 川 の 場 合 は 河 川 が 事

の自体としてあり、(人間の利用に役立って
 くあると"その"存くあり、)そして人間は
 生きてゆくのに、草木とその友人たる河川
 を利用して(助けを貰って、或いはおかげで
 生きながら)移動できるのは存"か"と"精
 神"も"り"にまわって"る"句"がある"と解した"の
 である)。自然一般と人間と"る"もの"と考
 える時、前者は後者のために在るのだ"とはイ
 スラームでは考へる"のである。自然はそれ
 としてそれ自体で存在する。これはユダヤ教や
 キリスト教とは根本的に異った思想である。

ユダヤ教やキリスト教では



この図式が成り立つのに好してイスラームでは



この図式が成り立つ。ユダヤ
 ・キリスト教の図式で神と人間との間 ~~を~~ \leftrightarrow
 で示して"る"のはユダヤ教では神と民族との
 契約と"る"ことを意味し、キリスト教では神

と人間と人間の感情の意味なる。相互に能動的

的 ~~である~~ = と ~~示~~ してゐる。この意味で ~~神~~

イスラームの ~~図~~ ~~式~~ ~~を~~ ~~み~~ ~~る~~ ~~と~~ ~~神~~ ~~と~~ ~~人間~~ ~~と~~ ~~関~~

係が \Rightarrow 示されてゐるのは \wedge イスラームに

あっては人間は神の奴隷として終始一貫し、神

の意志に完全に身をまかせ ~~る~~ (= ~~これをアラビ~~

ア語でイスラームと云ふ) ~~を~~ ~~も~~ ~~つ~~ ~~て~~ ~~人間~~ ~~の~~ ~~本~~

~~来~~ ~~の~~ ~~在~~ ~~り~~ ~~方~~ ~~と~~ ~~基~~ ~~え~~ ~~を~~ ~~た~~ ~~て~~ ~~て~~ ~~い~~ ~~る~~ ~~こ~~ ~~と~~ ~~が~~ ~~あ~~ ~~る~~ ~~て~~ ~~い~~

る。イスラームでは神と契約を結んでお

つたり、神との感情関係を密にしたり粗にし

たりするより能力を失し自由を人間は持

た ~~ら~~ ~~な~~ ~~ら~~ ~~ず~~ ~~と~~ ~~み~~ ~~る~~ ~~の~~ ~~で~~ ~~あ~~ ~~る~~ ~~。~~ ~~イスラーム~~ ~~で~~ ~~は~~ ~~神~~ ~~の~~ ~~絶~~

対性が強く主張されるが、それは反面に於て

人間の限定性の自覚をうながすものである。

人間は無能力なものであるとしてとらえられてゐる。

だがこの無能力な人間と云ふと云ふ方は何も即

不幸な人間とか無価値な人間と云ふには

ならない。人間がアッラーの前に於てなす

べも無能力である (⑤ 人間はその自

の行爲によつてアッラーに何の影響をもた

す)

(例は「アッラーから受けること」を示すに於て)

さ え さ れ 存 " と " の 句 句 (⑥) 上 記 本 6 章

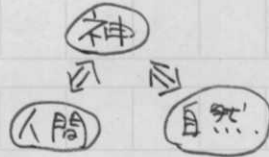
中⁹¹₁₀₄ 節 の 他 に も 中 23 章 中 78 節 で は ≪ ア ッ ラ ー
 = そ が 人 間 に そ の 聴 覚 . 視 覚 . 心 を つ く り 給
 う 氏 …… ≫ と ~~ある~~ ^{5.67.23-24 ~~中 23 章 中 78 節~~ に も 同 じ の が あ る} . √ = れ は ア ッ ラ ー が 車 に 人
 間 の 聴 覚 . 視 覚 . 心 の 訂 正 と な る 5) 存 も の
 で は 存 く て . せ し 3 人 間 が 聴 . 視 . 心 を 訂 正 し 存
 之 下 り し て " の は ア ッ ラ ー の 存 在 の 代 と
 述 べ て " 3) ア ッ ラ ー は 人 間 の 主 体 の 訂 正 存
 の 代 は 存 く . 人 間 ~~に 対 し~~ て ア ッ ラ ー ~~が~~ 主 体 存
 の 代 存 っ て " の 意 味 で は ア ッ ラ ー は 人 間 ~~の~~ 目
 目 耳 や 眼 の 向 け 所 と 真 正 対 話 の " 4 . は 人 間 の 背
 後 に " 3 の 代 存 3 = と を 述 べ て " 3 . 人 間 の
 目 耳 や 眼 の 死 角 に " 3 . と どの 代 存 " と 3
 に " 3 . ~~死 角 の 5~~ " 3 に " 3 " 3 " 3 " 3 と 3 .
 向 け 所 と 死 角 に は " 3 . て 決 して と どの 代 存
 " の 代 存 3 . 中 50 章 中 16 節 に ≪ …… ア ッ ラ ー
 は 人 間 の 血 管 の " も そ の 人 間 に 近 " 3 " 3 に
 " 3 " 3 と 3 . 従 っ て 遠 ざ け て と 3 之 3 存 3
 " の 代 存 3 近 ざ け て と 3 之 3 存 3 " の 代 存
 3 . 目 ~~が~~ 目 自 身 に と っ て 最 大 の 死 角 で 存 3

人間はこれをそれとして把握できるものに
 対して、その把握し得る働きそのものを
 と互えでいるものに對して何の働きかけも出
 来ないのである。AがBに對して働きかけ得
 るのはBがAのその働きかけの客體と成るの
 に可能なのである。BがAのその働きかけを
 互えでいるものとして成るものならば働きかけ
 得るが、成らないのである。故にイスラームでは必
 然的に神 \Rightarrow 人間の一方交通なのである。し
 かしこのことは人間が神に \rightarrow して全く ~~無心~~ ^{無心} も
 考慮も ~~無~~ ^無 は成らない存在 ~~に~~ ^に あり、どんな知り方
 も出来ず、どうしようも成らない没交渉で
 いることは意味し成らない。風 ~~を~~ ^{その} ~~見る~~ ^を みる =
 とは出来るが木の葉がゆれるのを見ることは
 によって風 ~~の~~ ^の 存在をしることに、人間は人間 ^{自然をみることは}
 (私自身や汝) がどのよう成る ~~に~~ ^に 方で生きて
 いるのか、を知ることはによって神を知るのである
 である。人間がどのよう成る \rightarrow されているのかを
 知れば人間は喜びに充たされる。人間のそれ
 以外の構造、在り様は人間によって成る \rightarrow である

人間が神に与って創造され、そしてその後

一瞬のときれもなく神に与って生かされ続け
 てゐるといふ事実に気がつくことである。マド
 は感謝する (شكر) と呼んだ。つまり感謝が
 信仰であった。従ってマドは信仰した
 者に対して無信心者といふ類の言葉を使
 ったのは「感謝した者 (كافر)」と呼んでゐ
 る。信^仰~~信~~とか~~無信仰~~とかといふ言
 葉ではなく、感謝とか無感謝といふ言葉^が用
 いられたことは改めて注意すべきことであ
 る。この喜ばしい事実に気がつく叫びが
 出たのである。それが讚美 (تسبيح) である
 。人間が人間の在り方と讚美ありといふかた
 ちに於て人間はアッラーに働きかけの存在
 である。その形でのみ神 ↔ 人間がイスラ
 ムで成り立ち、人間以外の被造物もまた神を
 讚美してゐるといふことである。(⑦ S.24.41 天に
 あり地にあるものは全てアッラーを讚美して
 いる。空を飛んでゐる鳥もまた羽根を振って
 アッラーを讚美してゐる。あらゆるものが実

に可ぞにアッラ~~ー~~への礼拝と讚美とをエスヤン
 と心得てゐる()。即ち或るゆる被造物が
 自らその個々の存在の反り方のアッラーに
 喜びを~~し~~支えを知つて歓喜の声をあげて
 るのであす。是として神 \leftrightarrow 自然も成り立つ
 。 即ち。



と~~し~~この図式が成り立つて
 いるのであす。この図式は実は未だまだ不完
 全である。この図式では人間と自然の関係が
 空白である。多論人間と自然とが没交渉では
 あり得ない。この問題を探る時、あの可から
 コーラニの自然観の核心へと入つてゆく。

イスラームに於て神 \leftrightarrow 人間の図式は、神
 が人間を創造され、一瞬のときれもなく人間
 を生かし続けられ支えつづけられ~~て~~ゐる~~こと~~
 。 是にて他方、人間がその~~こと~~に~~責任~~を
 その~~こと~~の存在り方を讚美 (تسبيح) ともつて受
 け入れる (受け入れられ~~る~~自由が人間に与えら
 れ~~る~~わけでは~~な~~いのであつて、責任なくと

「う」とは同様に受け入れると「う」とは
 である) = とを意味した。問題は、人間がそ
 の「う」に気付くと「う」とである。どう「う」
 理由で、どう「う」方法でそれに気付くのた
 りか。気付くにはその素因があり、イスラ
 ームでは ~~Allah~~ 神の徴し (أَلِهَاتُ، أَلِهَاتُ) がそれ

であるとする。この徴しはイスラームではか
 らり複雑な概念であるが、その ~~用法~~ 用法は
 人間の気付き (即ち今日の言葉で信仰) と誘
 発する素因の意味であると主張すべきであ
 る。さてこの気付きの素因となる神の徴しは
 自然のなかにのみある：人間もまた自然の一
 部であるというのがコーランの教えである。

上記の文に

~~用法~~ 本質的

コーランの様々な箇所では ~~Allah~~ と「う」言葉と
 使ってその ~~言~~ 言が ~~使~~ 使われていると同時に、例
 えば S.23.12 では人間の創造のプロセスが ~~微~~ 視的
 ・連続的に ~~描~~ 描かれて ~~い~~ いて、アッラーは一つの形成
 力であり、常に支え給う方であられ、アッラ
 ーが私をつくり、私はアッラーの作品であり
 、しかも刻々に於て常に理に私をつくり給

つつあること、即ちアッラーを離れた私存も
 ものは全く存在しな^らば、これが教えられること
 であることは人間が創造される程をみればそ
 うであることが^完明らかであることは、かたさとし
 られてゐるであらう。²アッラーと云ふ言葉の
 存在にかかわり、自分をも含めて人間のま
 わりの自然をみればその^二とに真の答と
 説かれてゐる。直接アッラーと云ふ言葉が用ゐ
 られてゐるとは例にたとえば、S.41.39では不毛
 なる大地にアッラーが水を降らし世給ふと、大地
 は動き出す。これにもアッラーの²アッラーの
 一つがあることあり、その他S.42.29, S.42.33~
 S.45.13, S.51.20~21, S.51.22~23, S.58.5 等々である。
 S.45.3~6 はかぎり重要であるからここに引用す
 る。天と地の中に信するものに好する²アッ
 ラーがみせてゐる。人間の創造、動物達の創造の
 存在には確固たる答に好する²アッラーがみせてゐ
 る。夜と昼の交替、アッラーが空から下し給
 う糧（それでもって大地をよみがえらせられ
 るのであるが）、風向きの変化の申にも知恵

ある者にとつてしるしかある。これ
 のもそのほかの如くは、 $\text{C} \Delta$ ともつて書くと
 のアッラーのしるしである。是れは、 $\text{C} \Delta$ 以
 外のどのものもその人間は信じなすこと
 か。また 5.5/20~21 には、大地には確固たる人
 にとつてしるしかある。凡人間自身の
 にもしるしかある。とある。

~~この 5.5/20~21 は
 上に引いた 5.45.3~6 は、地球の歴史~~

は、しるしとみる以下、 $\text{C} \Delta$ が主張されて
 ることが分る。即ち、天と地の間に、人間と
 動物の創造の中に、夜と昼の交代の中に、水
 が雨としてふり、 $\text{C} \Delta$ の中に、風向きが
 変ることは、アッラーのしるしであり、
 是れは、 $\text{C} \Delta$ の以外にしるしかあるわけでは
 ない。このことをもう少し考へてみよう。
 砂漠の放浪者アラブ、都市生活者と、 $\text{C} \Delta$ も
 キャラバンと組織して砂漠やオアシスを行く
 アラブ、大抵見る見わたる陽り出さかつて
 る天と地、その合するところは、 $\text{C} \Delta$ の
 人間とアラブ、 $\text{C} \Delta$ > < 太陽の昼と、月

や星くすの夜交代、飲料水をもたし、才
 アニスエはぐくそ雨、研嵐が近... = と、或...
 はまも存く遠ざかゝる = とエ告げゝる風向きゝの普
 化、これはアラブ(人間)の日常的存在生活の
 場、現実そのもの、目に見え肌で感じられる
 場、人間がそこに居るとこゝろのその場である
 。アラブ(人間)とヒリマク自然的全環境
 である。天と地と; その中を歩く人間とラウ
 グ; 雲、雨、風、昼と夜の交替、これが人間
 (アラブ)の生きる場である。その場が即ち
 アッラーのしるし痕のであり、なお重要存 =
 とには、その人間の自然的、環境的場以外に
 人間にとってアッラーがその「エ」は存... と...
 } = とである。上記の場はアラブにとって非
 日常的存在 = と、奇妙なものでは存く、全く日
 常的、定常的、平凡存、平均的存在ものである
 。つまり普通の人間が普通に生きてゐるそ
 の普通の場こそ、且つそれのみならずアッラーの
 しるしがあるところ。超自然的存 = と何もの
 , 或... は自然的である、ても奇妙な非日常的存在

ことなかに人間にとつてしるしはないの
 である。アッラーの「ミラ」に会ったければ、戸
 を開いて彼に同じことをしたり、修道院のよう
 な岩穴のなかにひそんだりするのではなくて
 、外に生かされねばならぬのである。

アッラーの「ミラ」は自然の中に、且つその中
 にのみあると云うその自然は、上でみたよう
 に、何か人間と厳密に区別された自然秩序の
 対象と存するよき自然現象だからではない。人
 間もその中に含められた日常の環境の現実を
 も指してゐる。要するに全てのモノのなかに
 アッラーの「ミラ」はあるのである。  そのモノ
 は超自然的ではないのである。

人間が自分の置かれた自然の環境と把握す
 るのは 直覚 による (コ-ラニではない、直覚
 (と知性) は ~ が であるのを見たいか?! と云う
 表現が用ゐられてゐる)。つまり自然の中に
 ある「ミラ」を見出す  は超直覚的、超知性的の能
 力が必要なのでなく、普通の人間 (ムハン
 マドもまた普通の人間であつた) : イスラーム

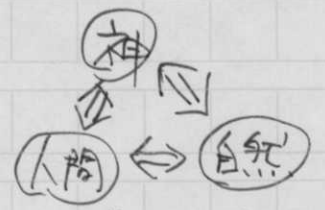
の重要な問題となる)。

自然は人間にとって奪はざる利用すべき素材
 にすぎない。このことは、そこには神の「エ」が居
 してゐるとしてゐるものでもある。ユダヤ教やキ
 リスト教でも自然にその創造主たる神の榮光
 をみよと「エ」とはあるであらう。しかしイ
 スラームに於けるほどしては、エはくくりに返し述べ
 られてゐるわけでは無い。寧ろイスラームで
 は神の「エ」の存する場として自然が極めて
 強く主張されてゐるものである。ユダヤ・キリ
 スト教にはほん「エ」と「エ」の術語をもよ、して
 くくりに返し述べる。ユダヤ・キリス
 ト教に於ける人間 \Rightarrow 自然と「エ」の図式は人間
 が自然 ~~に働き~~ ^{に働き} かけて利用する エ と エ 示してゐ
 るが、エ、エ、エ、エ のまゝの意味でイスラーム
 にも エ の図式が当てはまる。そしてイスラーム
 には エ に エ に加えて自然の中に神の「エ」を護
 りと エ と エ の働きかけがあるのである。ま
 た自然は神の「エ」と人間に伝達するものとし
 て人間に好して働きかけるとも エ である。人間

も自然であって、イスラームでは自然といふ
ものの概念が能動的であり、ユダヤ・キリス
ト教のそれのこゝと受動的、静態的でない。

≪天と地の間の木とゆきものはアッラーの
ものであり。アッラーのものにはありものは全
てアッラーを常時讃美してゐることが存し≫
(S.21.19) のであって、従つて ≪……空と
んてゐる鳥もまた羽根を広げてアッラーを讃
美してゐるものがある……≫ (S.24.41)。鳥は
けではなく木影を讃美してゐるといふ^⑧。(
⑧ S.)。アッラーを讃美するといふ
活動は被造物によつて本質的存在とがさるもの
でありから、従つて本質的には人間はとり下
つて、鳥や木影と異なつてはゐるものである。
自然と人間とを同列に置くことの考へ方はユダ
ヤ教やキリスト教にはないイスラーム独自の
ものがある。同じ^人間 ⇒ 自然といふ図式で
もユダヤ・キリスト教のそれとイスラームの
それとは意味がさかしくなると見えてきた。人
間も自然の一部であり、自然と並ぶべきもの

であって、両者ともに神の「~~存在~~」をたててい
~~る~~ ~~こと~~ ~~が~~ ~~その~~ ~~相~~ ~~違~~ ~~い~~ ~~を~~ ~~示~~ ~~す~~
 とイヌラー
 ある。また、神の「~~存在~~」は自然を通してのみ人
 間にとどくから自然の立場にたてば（自然も
 その「~~存在~~」^しきとした立場をもつている。何故な
 ら神を讃美する主体は「~~人間~~」だから。個々の自然
 物はその独自の固有の立場をもつ。何故なら
 神とその固有の仕方に於て讃美すべき主体
 は「~~人間~~」から（~~人間~~）人間への「~~存在~~」伝達者として（
 自然の個々の物がそれ「~~存在~~」^しる仕方に於て伝
 達する）人間に働きかける（それ「~~存在~~」^しる仕
 方に於て）~~人間~~ ~~と~~ ~~自然~~ ~~の~~ ~~関係~~ ~~は~~ ~~人間~~ \leftrightarrow
 自然とやるのがより正確なのである。こゝし
 て我々はイヌラーに於ては



と「~~存在~~」dynamicな関係が成り
 立つていふことが分るのである。

人間は自らの中にまた自らをとりまく諸環
 境の中に絶対者の「~~存在~~」を見出るのであってこ
 れらのものから目を転じては（転じよすにも

転ずるとはなるがな)と、この^はイスラーム
 の若し、態度である。これは可くさまイスラ
 ムの現実重視と結びつく。イスラームには
 キリスト教の修道院制度のようにならぬ世との
 接触を絶つて、神への瞑想にふけるこ
 うな制度はない。この世こそが大切な
 んである。この世にこそ、そしつてこの世に
 け人間への^愛が存在してゐるのだから。こ
 の現世を大切にすると、その態度は別に快樂主
 義だとか享樂主義だとおぼえてゐるわけでは
 ない。ただ、人間と人間、~~私と私~~^今こゝで生きて
 いる私と汝とあつた存がりの中に、今こゝに私
 をとりまゝにしてゐる自然の中に、私(人間)の
 求めるものの^{私が必要とするものの}全てが^今蔵されてゐるであつて
 それ以外のものの中に求める必要はないし
 且つ蔵されてはゐるのだと考へるのであ
 る。

キリスト教は尋かれ少なかれ、神を今こゝ
 にある私と汝、私と汝をとりまゝ自然の彼方
 に求めようと下り傾向にある。現世と神の世

界は重なるて「存」となる。

こゝろ両者の傾向の5が「かきみで、イ
スラームでは現実、現実と狂「まわって現実
の反諸制度、諸科学が長足の進歩をとり、キ
リスト教^世界ではその逆であつたかといふと
一面そうであり、一面そうではない。産問の初
期の段階、[→]未だ幼稚な段階にある物理学や化

学、医学に於ては現実への眼差しが熱さ^か ~~主~~

役を演^いじるよすがはイスラーム圏の3がリー
ドして「たが、より高度な段階に存在すると逆転
されて今日に「たつてゐる。

ヨロコッパ人のキリスト教は神を自然の外
に求めたが、このことは何もヨロコッパ人が
自然に関心を^い持たなかったことを意味しな
い。神ぬきでの自然、神による人間に利用
されるべくつくられた自然を、人間に役立て
る材料としてこれを処理すべくこれに向つた
のであり、イスラームでは神^の愛を^の見出す
ために自然に向つた、つまり神に出会うため
に自然に向つた。これは大きなちがひである

。キリスト教がヨーロッパで確立されると
 僧侶階級が現世に於ても互敵的地位に立とす
 とした。現世のものでは「宗教が現世と互敵
 しようとするのは明かには矛盾で、当然にも
~~現世的~~ 自然と人間から神をしの出そうとする
 動きがある^た。以後ヨーロッパの歴史は人
 間と自然の世界（＝この世）から神をあの世へ
 と追放し、「わがや、か」「ばさ」して、やれ
 せ「せ」したと「」が「この世で人間のほ
 し「まま」をこをやるた歴史である。キリス
 ト教の教義自体に現世からの離脱的要素があ
 るわけでは、僧侶が現世をも互敵しようとした
 のがともともと無理であった。人間と絶対的
 中心とするヨーロッパでは神と人間とが一
 流に同居できな「。あの世では神が中心であ
 り現世もこの世では人間が絶対的中心で居
 れば居ななかつた。（あの世に於てすら神の
 人間化が行なわれる傾向にある）。別に因果
 関係ではな「の、キリスト教の成立と「す
 くと自体、同時進行的にその要素としてヨ

ロッパの人間中心主義が^{作用}~~作用~~してゐるのだ
 である。だから自然からの神の追放はユ-ロッパ
 キリスト教ではまさに行なわれべきとして行
 なされたのである。

神を自然から追放し(と云ふことはより精
 確には自然と人間との関係には神は一切かか
 わりをもたぬと云ふこと)。自然と人間が利
 用すべき材料とみなしてこれに立に向ひ、人
 間の欲望に役立てよと~~あり~~^{あり}のユ-ロッパ
 的態度である。人間の欲望には果てが無く、
 この欲望に役立てるための材料の研究は欲望
 が続く限りありあり、従つて果てしなく~~研究~~^{研究}は
 続くであらうか。イスラ-ムでは事情が異な
 る。自然は人間の材料^{あり}ではなく、その^{あり}本

質的には人間と並んでアッラ-を讃美する位
 在であり、その中にはアッラ-の~~神~~ももって
 あり、人間をそれを通して神に奉告できるとす
 る。つまり~~神~~が採られればもうそれだけの
 である。そこで採出はとまる。人間の欲望の
 ために自然を研究してゐるのはほんのだから

ら。現実的諸序の研究に於けるヨーロッパ人に
よる逆転はその子に生じ下もろと思
われる。

コ-ア-ン

の

自然観

(かたがひ 可成れた 論文の idea
と 可成り 得る)

序 言

コーランには様々な問題が論じられている。
 。或いは様々な問題について啓示が下され
 ている。そのなかで自然がどのようにみられ
 ているかを追究することが本論文の目的であ
 る。~~そのように注意例としてコーランの自然観を~~

~~題~~。イスラーム文化はコーランとその
 出発点と下す。これが後のイスラームの哲学
 と科学の礎となつたのである。この意味でコ
 ーランはイスラームの哲学思想、科学思想の
 源泉であり、コーラン中に見出される自然観
 はイスラーム哲学、科学の自然観の骨子とな
 るものである。

(この要旨を凡いかなるほどである。徹頭徹尾人間とエホバ
 のかがかりが下とされている。エホバの人間化と際する)

旧約聖書には自然に関する記述が極めて乏
 しい。創世記や出エジプト記で天地創造や紅
 海が二つに割れた様子が描かれ^ているが、大体
 その程度で、もっぱらイスラエル民族と神エ
 ホバとの関係に記述がしぼられている。エホ

バはイスラエル民族を愛し、イスラエル民族もエホバを尊ぶと...の理想なのであるが、イスラエル民族の、エホバへの態度が、実に...

「加~~減~~で、^減ややもすればエホバを忘れて他の神々を拝したりする。これに対してエホバが懲罰を下し給^給。イスラエル民族に不幸がおとすれ、そのあまりのつらさに^泣き叫ぶと、エホバは哀れになつて罪を許し給^給。イスラエル民族も更生を誓う。そしてまたエホバを忘れて不幸が見舞うと...くり返したのである。旧約聖書を一言して流れてくるのは「イスラエル民族中心主義」⇒と名付け得る態様である。ここでは人間はイスラエル民族に属するが、属する「子」でも^ニの民族に役立つ(少^少くとも友好関係にたつて「る」)階りに於て生存を許されるのであって、それ以外^(の民族)は一顧だに及ばない。神エホバはその^{民族}に与つての~~神~~ではな^神いのである。神エホバは徹底的にイスラエル民族の利益のみを固く存心するのである。「なす」イスラエル民族の繁栄が最も

きものとしてゐる。 = の契約にあってはエ
 ホバは常に = の民族の下手に立ってゐて、 =
 の民族が主としてゐるからである。ともあ
 らぬ有無を言わさぬ絶対的の民族中心主義である
 。旧約の世界で描かれてゐる = の民族は或る
 意味では弱々しいが (常に不安定で罪にはし
 り易い) 、^別 の意味では強者とゐる。エホ
 バと (不平等な、自分達に有利な) 契約を結
 び得るからである。如何に弱(2)しくとも存にも
 のかと契約を結び得るといふことは大變な
 とである。契約はその当事者の自主性を前提
 とする。契約といふものは ① 互いに相手と
 選んでゐることは、② また契約を結ぶ自由な
 し、結ばない自由があることを暗黙の前提と
 する。エホバと契約を結ばない在り方もこの
 民族にとつて可能であることを意味するので
 ある (多論 ^{に在り} ~~は~~ = の民族にとつて悲惨を招
 くのではあるけれども)。後に述べるけれども
 此のことはイスラエルの神と人間との関係に

換言すれば一字に神が^(別の一字に)あって、又それは全く没交渉の人間存在のもの^(それは人間とそれ自然とそれ)があって、両者が契約して^(それは)確ったり……
 ……その存在とは絶対にあるとする。 (5)

一字には、神と^(別の一字に)きり離された人間の在り方存在
 として…そのものはそれぞれあり得る…とする。
 人間は神の奴隷 (عبر: アブド) としてそれぞれ
 もの初めに^(それは)おいてつくられ、人間^(それは)として生き
 て…る限り、一瞬のときれもなく奴隷として
 在り続けるのである。従って神と人間とが契
 約を結ぶ…その考え方は⁽¹⁾。 (1) コーラ
 ンのほかで旧約の契約思想について述べられ、そ
 れを肯定するもの^(それは)があるにはある。しか
 しそれは神と人間との契約を^(問題として)正面からとりあ
 げて…るのではなく、コーランの教之は旧約
 や新約の教之を踏襲するものであると^{(契約に不可分のもの(それは人間とそれ自然とそれ))}
 いう出所^(それは)である)。契約はその関係にある
 者同志が互^(二の契約関係には…者)いに^(それは)対して特権的地位をし
 める性格がある。旧約聖書では、真にイスラ
 エル民族が絶対的に特権的地位をしめている
 のである。イスラエル民族は神エホバの前に
 唯一^(それは)独尊の地位にたつ。他の民族はこれにあ
 ずかず。たゞイスラエルに奉仕するものがあ
 りとされ、その他の諸動物や草木に…たつて

↓
 がある限り

はその記述がさしとぼし"の"である(② イザ
 ヤ書で~~羊~~が狼のさば"で"こ"…と"と"と
 3は例外)。イスラ-ムではどうか。^身民族が
 他の民族に對して特権をもつと"と"は
 とは一切若くは"は"。 ~~イスラ-ム~~では民族と
 "と"と"若くは"は"の"である。 ^{あつて}全て
 神の奴隷として人間で^{あつて}全人類平等である。
 神と人間との間の契約は"と"も"は"は"
 。若し"と"である"と"れば、神の側から一
 方の"と"つけ"に"ある命令"に"に"相当する。
 命令は契約ではあるま"。 ^(つまり人間と生きる神に"と"した=と)
 何国背かれても決して絶滅し給う"と"の
 "エホバ"、"エホバ"の"と"愛の神と"と"要
 素がとり出されて非イスラエルのギリシヤ語
 世界で展開されたのがキリスト教に他な"と"
 "。"と"では民族と"と"概念は当然し"と"
 されて代りに普遍的な人間と"と"概念が
 くる。ユダヤ教^(に於ける)イスラエル民族の代りに人
 間と"と"も"と"なければキリスト教が生"と"
 の"と"、"と"キリスト教では従"と"て当然。絶対

無神論のあわれみをもつた神による規定は、迷妄のたがひ
ごまかす人間を中心にす、その幸福を至上目的とする
限り望ましいことである。

(7)

的人間中心主義である。つまり人間が何回神
に背をしても決して人間を見捨ててしまわれ
ない神と云う図式が出てくる。新約全篇を通
じてみられるのは世界の王座に人間が座して
いる姿である。人間が神をひきずりまわして
いる物語である。神は脅かされると強迫され
ばされるほど。それは人間への脅かであるのた
がひが下す人間中心主義が主張されてゆく
ことにある。ユダヤ教では祖神がイスラエル
民族に固定されてあり、キリスト教では祖神
が人間に固定されてゐる。それぞれも
民族及び人間及びが特権的位置をしめる世
界観をもつてゐる。この西世界観に於ては神
と民族(人間)以外のものはあまりか之りみ
られない。神と人間(民族)以外のものにつ
いてあまり説述がなされず、それ以外
のものについては関心が払われずと
いふのがより近しい。勿論万物は神の創造によ
るのであるから、被創造者として神と結ばつ
けられるが、同じ被創造者たる人間(民族)

と その 結 び つ き に 於 て は 断 ~~然~~ 了 じ か っ た 。 神 と 人
 間 (民 族) 以 外 の も の を 自 然 と 呼 ぶ 。 二 と に 可
 々 ば 、 自 然 は 或 り 時 神 に 創 造 さ れ て 、 そ の 種
 は も っ ぽ し 人 間 (民 族) の 為 に 立 ち 上 れ る も
 の と 一 つ 二 つ = に 在 る か の 点 じ ゃ 無 い 。 神 と 人
 間 (民 族) と 自 然 ^と 三本柱にて 通 然 と 区 分 さ れ 、 神 は 超
 越 者 と 一 つ 自 然 を 必 要 と し 給 わ れ ぬ か じ (そ の
 < 世 界 人 間 か じ の 為 に 必 要 と さ れ る し し ... 等)
 も っ ぽ し 自 然 は 人 間 (民 族) が 生 き て 用 く 行
 ぬ の 材 料 ^の 呈 供 者 と 一 つ み ら れ て 居 る 。 畜 牧
 料 と 一 つ 二 つ の 点 じ ゃ 無 い 。 エ ン ン ヤ 教 、 キ リ ス ト
 教 の 世 界 観 か じ 有 れ ば 、 牛 が 生 き て 居 る の は
 、 肉 が 食 べ ば 残 存 貯 蔵 さ れ る 為 り だ け だ け だ け だ け
 じ 二 と に 存 じ ゃ 無 い 。

イ ス ラ ー ム で は 全 く 了 じ か っ た の だ け だ 。 迄 可
 一 に 人 間 は 他 の 自 然 物 に 対 し て 神 の 前 に
 何 の 特 権 も 持 ち 上 げ ない 。 ^③ ③ 人 間 が 特 権 と
 も 持 ち 上 げ ない 二 と を 述 べ て 居 る 句 は コ - ラ ン 中 二
 見 出 さ れ る 。 ま た 他 方 、 特 権 と
 も 持 ち 上 げ ない 二 と を 述 べ て 居 る か の 点 じ ゃ 無 い 句 も

ある。例えは人類の始祖アダム⁴の創造に際し
 アツラ一は天使達にアダムに拝するを命じ
 された事である。これは人間は本来とるにた
 りないものから創造されたのであるけれども
 他はさぬアツラ一の手による、で創造されたこ
 とに於て尊^々の^々であって天使も等^々に拝するが
 ことと存在たり得るものであること。これは必
 ず人間だけにはないもの^々であること、と
 んなものであるアツラ一の手による、で創造さ
 れたものは全て、ために天使が拝するほど尊^々
 であること、そしてアツラ一が拝する
 べき命じ給うた相手は他の^報造物ではなく天
 使であったこと、つまり諸^報動物や草木に人間
 を拝するべき命じられた事さぬこと。アツラ
 一が強調されてゐるものは自分の手による、で成
 ったものは尊^々と^々のこと。それが何であれ
 アツラ一の手によるものは尊^々と^々のこと。
 また存在するものでアツラ一の手によるもの
 のは何もないものか。全て現に存在し
 てゐるもの^報のものはアツラ一の手による

ア

ものとして無条件に (~~だまって~~ ^{だまって} 天使 ~~に~~ 降下するよ
う命じらるるほど) 尊 " こと が 言 わ れ て " いる
と 解 する こと が 生 来る の で 矛盾 が 存 在 ") 。

人間 の ア ッ ラ ー の 前 に 他 の 自然 物 に く び ぐ べ て
時 ね を ~~もた~~ ^{もた} ぬ こと を 述 べ て " いる 句 は 非 常 に 沢
山 あり 。 例 之 ば 無 造 作 に 手 近 な 一 句 を 引 用 可
る 存 在 ば 第 40 章 第 57 節 に << 天 と 地 の 創 造 は 人
間 の 創 造 より も 偉 大 な 事 である , 大部分 の
人 は それ を 知 ら ず 存 在 " けれど も >> である
。 コ ー ラ ン に は " 天 と 地 と " の 表 現 が 出 現
ば 出 現 する 。 それ ~~出~~ ^出 現 する こと だ け の 個
所 の 文 脈 に よ り 微 妙 な 差 味 の 差 が あり 得 ば 可
論 である こと である が 総 じて 自然 一般 を 主 体 と
み てる " 。 つ ま り 上 の 句 は 人間 の ため に 天地
が 創 造 さ れ た の だ " 存 在 " こと , 人間 の ため に
自然 一般 が あり 得 ば 存 在 " こと が 言 わ れ て " いる
(④ 人間 の 住 ん で " いる 大地 が ぶ る ぶ る なる
④ " よ う に 重 し こと して 山 を 置 き , 人間 を 尊 ぶ ため
に ~~河~~ ^河 川 を つ く した こと 説 して 得 る 事 存 在 句 も
あり 。 こと 例 之 ば 河 川 の 場合 迄 河 川 が ぞ

と人間と人間の感情を意味する。相互に能動的
 的 ~~な~~ ^で ~~あ~~ ^る = と ^を 示してゐる。この意味で ~~神~~
 イスラームの ~~図~~ ^法 ~~を~~ ^み ~~る~~ ^と ~~神~~ ^と ~~人間~~ ^と ~~関係~~
 係が \Rightarrow 示されてゐるのは、イスラームに
 ついては人間は神の奴隷として終始一貫し、神
 の意志に完全に身をまかせ ^る (= ^を ^た ^を ^ア ^ラ ^ビ ^の ^語 ^で ^イ ^ス ^ラ ^ム ^と ^い ^う) ^を ^も ^つ ^て ^人 ^間 ^の ^本
^来 ~~の~~ ^在 ^り ^方 ^と ^差 ^え ^ら ^れ ^て ^い ^る ^こ ^と ^が ^あ ^る ^こ ^と ^で ^い ^は
 る。イスラームでは神と契約を結んだ ^り ^や ^ぶ
 り、神との感情関係を ^密 にし ^た ^り ^粗 にし
 た ^り ^あ ^る ^よ ^う ^な ^能 ^力 ^を ^も ^つ ^て ^自 ^由 ^を ^人 ^間 ^は ^持 ^た
 ない ^こ ^と ^を ^み ^る ^の ^こ ^と ^で ^あ ^る。 ~~イスラームでは神~~ ^の ^絶
 対性が強く主張されるが、それは反面に於て
 人間の陽定性の自覚を ^も ^つ ^た ^り ^あ ^る ^こ ^と ^で ^あ ^る。
 人間は無能力な ^り ^あ ^る ^こ ^と ^を ^し ^て ^と ^ら ^せ ^ら ^れ ^て ^い ^る。
 だがこの無能力な人間と ^い ^ふ ^こ ^と ^を ^し ^て ^い ^ふ ^方 ^は ^何 ^も ^即
 不幸な人間とか無価値な人間と ^い ^ふ ^こ ^と ^に ^は
 ならない。人間がアッラーの前に於て ^あ ^る ^こ ^と
 べ ^も ^つ ^た ^り ^あ ^る ^こ ^と ^で ^あ ^る (⑤ 人間はその自
 己の行爲によつてアッラーに何の影響をもたせ

(例は「アッラーから受ける」といふことは「神に於て」)

さ え さ れ 存 " と " の 句 ば (⑥) 上 記 が 6 章

⑥

が 91 104 節 の 他 に も が 23 章 が 78 節 で は << ア ッ ラ ー

= そ が 人 間 に そ の 聴 覚 . 視 覚 . 心 を つ く り 給

ふ 所 …… ≫ と あり . ~~5.67.23-24~~ ~~に も 同 じ の が あり~~ = これは ア ッ ラ ー が 車 に 人

間 の 聴 覚 . 視 覚 . 心 の 対 象 と な る 所 存 も の

で は 存 く て . ~~さ~~ し ~~も~~ 人 間 が 聴 …… 目 視 目 視

の 目 視 し て " の は ア ッ ラ ー の 物 き 存 の 目 と

並 べ て " 有) ア ッ ラ ー は 人 間 の 主 体 の 対 象 は

の 目 視 存 く . 人 間 ~~に 対 し~~ て ア ッ ラ ー ~~が~~ 主 体 は

の 目 視 存 て = の 意 味 で は ア ッ ラ ー は 人 間 ~~の~~ 目

の 目 視 や 聴 の 向 け 所 と 真 正 対 象 …… は 人 間 の 背

後 に " の 目 視 存 = と を 並 べ て " 有 . 人 間 の

目 視 や 聴 の 死 角 に " 有 . と どの 存 " と 有

に " 有 . ~~と~~ の 目 視 存 " に " 有 …… 目 視 存

向 け 所 存 死 角 に 有 " . て 決 して と どの 存

" の 目 視 存 . が 50 章 が 16 節 に << …… ア ッ ラ ー

は 人 間 の 血 管 の 目 視 存 人 間 に 近 " と 有 有 に

" 有 有 と 有 . 従 っ て 遠 近 目 視 存 と 有 有 有

" の 目 視 存 有 有 有 有 有 有 有 有 有 有 有 有

有 . 目 ~~が~~ 目 自 身 に 有 有 有 有 有 有 有 有 有

じに、それと全く同じようにアッラーは人間
 にとって最大と同等であるとしてその存在は
 である。人間にとってその血管はその一部
 である。その中で血管は人間そのものである
 るとしてである。~~アッラー~~アッラーはその血管
 であり人間に近^く~~い~~るとしてである。人間が生き
 るのはアッラーの一つの表現であるとしが言
 えるようにある。ともあれ人間としての存在
 はその存在そのものである。アッラーはアッラーにアッラー
 としてある。ユダヤ教やキリスト教では神と
 人間との関係が~~神~~神 \longleftrightarrow 人間として図式で
 示されるのに対してイスラームでは神 \implies 人間
 として図式で示されると述べた。~~アッラー~~アッラー
 では人間から神への働きかけは存在しないのか？と
 いう。人間は神に働きかける如何なる機能もも
 っていない。目が目自身を決してみられないように
 してアッラーをみることは出来ない。鼓膜の振
 動自体の音を耳がきけることはなくアッラーの
 声と聞きとれない。脳自体の働き自体を脳は概念化
 できないようにアッラーを概念化できない。

人間はこれをそれとして把握できるものに
対して、その把握し易さゆきそのものに
と互えたいものに対して何のゆきかけも出
来ないのである。AがBに対してゆきかけ得
るものはBがAのそのゆきかけの客体となる
に可能なのである。BがAのそのゆきかけと
互えたいものとしてあるならばゆきかけ
易さがあるのである。故にイスラームでは必
然的に神⇒人間の一方交通があるのである。し
かしこのことは人間が神にたいして全く~~関心~~も
~~考慮~~も~~持~~たない存在~~は~~あり、どんな知り方
も出来ない。どうしようもないから没交渉で
"と"は"と"を意味し"風"を~~みる~~みる=
とは出来る"木"の葉がゆれるのを見ること
によって風~~は~~存在を~~し~~るゆきには、人間は~~人間~~人間
(私自身や汝)がどのよう~~な~~な~~方~~方で生きて
いるのかを知ることに~~よ~~よって神を知るのだと
ある。人間がどのよう~~な~~な~~方~~方に~~よ~~よって"と"のかを
知れば人間は喜ぶに~~充~~たされる。人間のそれ
以外の構造、在り様は人間に~~よ~~よって~~関~~関~~心~~心~~を~~を~~持~~持

自然をみる = 人間に
よって
対

人間が一瞬のときにもなくアッラーにおいて
生かされ続けていること、事実には気づくこと、
この喜ばしい事実には気づくこと、これが
アッラーを信ずること、これがアッラーである。
~~アッラー~~ イスラ-4に於いて信仰とは何のことなるのである。(17)

混沌であり不幸である。単に事実としてそう
である。それはそれが人間~~本~~本来の在り方では
ないからである。人間が人間本来の在り方に
気づいた時人間は喜^{ぶ。} ~~喜ぶ。~~

~~人間は自然に生かされ続けていること、事実には気づくこと、
この喜ばしい事実には気づくこと、これがアッラーを信ずること、
これがアッラーである。アッラーを信ずること、これがアッラーである。
アッラーを信ずること、これがアッラーである。アッラーを信ずること、
これがアッラーである。アッラーを信ずること、これがアッラーである。~~
信仰とは何のことなるのである。信仰とは何のことなるのである。

人間は自然に生かされ続けていること、事実には気づくこと、
この喜ばしい事実には気づくこと、これがアッラーを信ずること、
これがアッラーである。アッラーを信ずること、これがアッラーである。
アッラーを信ずること、これがアッラーである。アッラーを信ずること、
これがアッラーである。アッラーを信ずること、これがアッラーである。
アッラーを信ずること、これがアッラーである。アッラーを信ずること、
これがアッラーである。アッラーを信ずること、これがアッラーである。

人間は自然に生かされ続けていること、事実には気づくこと、
この喜ばしい事実には気づくこと、これがアッラーを信ずること、
これがアッラーである。アッラーを信ずること、これがアッラーである。
アッラーを信ずること、これがアッラーである。アッラーを信ずること、
これがアッラーである。アッラーを信ずること、これがアッラーである。

人間が神によって創造され、それこそその後

一瞬のときれもなく神によって生かされ続け

てゐるといふ事実に気がつくこととエムハニマド

は感謝する (شكر) ^ニと呼んだ。つまり感謝が

信仰であった。従つてエムハニマドは信仰した

者に対して無信心者といふ類々の言葉とつ

かわつたので感謝した者 (كافر) と呼んでゐ

る。信^仰~~信~~とか~~無信仰~~とかといふような言

葉ではなく、感謝とか無感謝といふ言葉^が用

いられたことは後悔にとどめらるべきことであ

る。この喜^ばしい事実に気がつくゆゑに叫

び出したに^あらる。それが讚美 (تسبيح) である

。人間が人間の在り方と讚美ありといふかた

うに於て人間はアッラーにゆきかけらるであ

る。そのいふ形でのみ神 \longleftrightarrow 人間がイスラ

ムで成り立つ。人間以外の被造物もまた神を

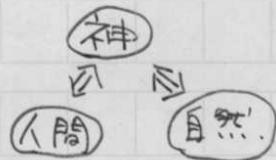
讚美してゐるといふこと。 (⑦ S.24.41 夫に

あり地にありものは全てアッラーを讚美して

ゐる。空を^とんでゐる鳥もまた羽根を振つて

アッラーを讚美してゐる。あつちのものが実

に可ぞにアッラーへの礼拝と讚美とをせよと
 と心に記してゐる()。即ち其のゆるぎなき造物が
 自らその個々の存在の反り方のアッラーに
 喜びを申し支えを知って歓喜の声をあげて
 るのであす。是を以て神 \leftrightarrow 自然も成り立つ
 。 即ち。



と云ふ図式が成り立つて
 いるのであす。この図式は実は未だ未だ不完
 全である。この図式では人間と自然の關係が
 空白である。勿論人間と自然とが没交渉では
 あり得ない。この問題を探る時、その可から
 二つ二つの自然観の核心へと入ってゆく。

イスラームに於て神 \leftrightarrow 人間の図式は、神
 が人間を創造され、一瞬のときれもなく人間
 を生かし続けられ支えつづけられゝるに
 。 是にて他方、人間がそのに負付いて、
 そのより存在り方を讚美 (تسبيح) ともって受
 け入れる (受け入れらるゝ自由が人間に与えら
 れてゝるわけではなからぬのであす。負付くと

"う" こととは同様に受け入れると "う" = となの
 である) = とを意味した。問題は、人間がそ
 の = とに気付くこと "う" = とである。どう "う"
 理由で、どう "う" 方法でそれに気付くのだら
 うか。気付くにはその素因があり、イスラ-
 4 2 は ~~その~~ 神の徴し (أَيُّهَا، أَيُّهَا) がそれ

であるところ。この徴しはイスラ-4 2 ほか

により複雑な概念であるが、その ~~その~~ 本質的
 上には人間の
 人間の
 人間の
 人間の

人間の 気付き (即ち今日の言葉で信仰) を誘
 惹する素因の意味である主張すべきであ
 る。さてこの気付きの素因となる神の徴しは
 自然のなかにのみある：人間もまた自然の一
 部であること "う" のがコーランの教えである。

コーランの様々な個所で أَيُّهَا と "う" 言葉と
 使ってその = とが ~~言わ~~ れていると同時に、
 例

えば S.23.12 では人間の創造のプロセスが ~~微~~ 視的
 ・連続的に ~~描~~ かれていて、アッラーは一つの形成
 力であり、常に支え給う方であられ、アッラ
 ーが私をつくり、私はアッラーの作品であり
 、しかも刻々に於て常に理に私をつくり給う

つづあること、即ちアッラー - エ離れられた私存も
 ものは全く存在しな... ことが教えられること
 、 = の = とは人間が創造される様を みれば ぞ
 う... ことか ^宛 何かれるかは... かとさして
 れて... 子の... 言葉のある
 存しにかかわり、自分をも含めて人間のま
 わりの自然をみればその ^二 とに気がつく筈だと
 説かれて... 直接 アッ と... 言葉が用... され
 れて... こと = 3 と例に... S.41.39 には不毛
 な大地にアッラー - が水とふり世給すと、大地
 は動きふくむ。 = にもアッラー - の アッ の
 一つがあることあり、その他 S.42.29, S.42.33~
 S.45.13, S.51.20~21, S.51.22~23, S.58.5. 等々である。
 S.45.3~6 はかなり重要であるから = = に引用す
 ると、天と地の中に信するものに好する アッ
 がみよて... 人間、動物達の創造の
 存かには確固たる者に好する アッ がみよて...
 る。夜と昼の交替、アッラー - が空から下し給
 う糧 (それでもって大地をよみがえらせられ
 るのであるが)。風向きの変化の中に恵

ある若に 七つてしるしか 亮して 二。 二れさ
 の もの は 幾れ ぬに 七つてしる と 二了
 の アッラ - の しるし ぬに 。 二了 二了 二了 以
 外の どす 二了 もの を 人間 は 信じ ぬと 二了 の
 か。 まて 5.5/20~21 二は。 大地には 確固たる 人
 に 七つてしる しか ぬに。 七等 人間 自身 の 七か
 に も しるし しか ぬに。 と ぬに。

~~二に 三用した 5.45.3~6 二ぬに 七等 七等 七等~~

二了 し て ぬに と 以下 二 と が 主張 二れ て 二
 三 二 と が ぬに。 即ち、 天 と 地 の 中 に、 人間 と
 動物 の 創造 の 中 に、 地 と 天 の 交代 の 中 に、 水
 が 雨 と 二れ ぬに 二れ ぬに 二れ ぬに 二れ ぬに、 風 向 き が
 変る 二れ ぬに 二れ ぬに 二れ ぬに 二れ ぬに、
 二了 二了 二了 の 以外 に しるし しか ぬに 二れ ぬに
 二れ ぬに。 二れ ぬに 二れ ぬに 二れ ぬに 二れ ぬに。
 砂漠 の 放浪者 アラブ。 都市 生活者 と 二れ ぬに も
 キャラバン と 組織 して 砂漠 や オアシス を 行く
 アラブ。 二れ ぬに 二れ ぬに 二れ ぬに 二れ ぬに 二れ ぬに
 二れ ぬに 二れ ぬに。 その 合 二れ ぬに 二れ ぬに 二れ ぬに 二れ ぬに
 二れ ぬに 二れ ぬに 二れ ぬに 二れ ぬに 二れ ぬに。 二れ ぬに 二れ ぬに 二れ ぬに 二れ ぬに。

や星くすの夜交代、飲料水をもたさし、オ
 アニスエはぐくを雨、研嵐が近…ニと、或…
 はまも存く遠ざかると告げる風向きの変化
 化、これはアラブ（人間）の日常的存在の
 場、現実そのもの、自に見之肌で感じられる
 場、人間がそこにあるとこそその場がある
 。 アラブ（人間）ととりまき自然的全環境
 である。天と地と；その中を歩く人間とラク
 ダ；雲、雨、風、昼と夜の交替、これが人間
 （アラブ）の生きる場である。その場が即ち
 アッラーのしるしなのであり、最も重要な
 ことには、その人間の自然的、環境的場以外に
 人間にとってアッラーからの「ミ」は存…と…
 』ニとである。上記の場はアラブにとって非
 日常的存在ニと、奇妙なものでは存く、全く日
 常的、定常的、平凡な、平均的存在ものである
 。つまり普通の人間が普通に生きて…るそ
 の普通の場こそ、且つそれのみにはアッラーの
 しるしがあると…』。超自然的なニと何もの
 、或…は自然的である、ても奇妙な非日常的存在

ことなかなには人間にとつてしるしはな^いの
 である。アッラーの^{ミラクル}に^あてれば、戸
 を閉じて窓に^とじこもったり、修道院のよ
 うな岩穴のなかに^{ひそ}んで^いるの^ではな^くて
 、外に出なければ^ならぬのである。

アッラーの^{ミラクル}は自然の中に、且つその中
 にのみあると^いうその自然は、上で見たよ
 うに、何か人間と厳密に区別された自然秩序の
 対象と^なるよ^うな自然現象^にはな^く、人
 間もその中に含^まれて日常の環境の現実^と
 も指して^いる。要するに全^ての^まじりな^かに
 アッラーの^{ミラクル}は^ある^のである^が、そのま
 は超自然的ではな^いのである。

人間が自分の置かれた自然的環境と把握す
 るのは^{直覚}による(コ-ラニではよく、^{直覚}
 は[〜]が^{……}であるのを見^ては^いか[?]!)と^いう
 表現が用^いられる)。つまり自然の中に
 ある^{ミラクル}を見出^すには^超直覚的、超知性的能
 力が必要^なのではな^く、普通の人間(ムハン
 マドもまた普通の人間であ^る、た^ゞイスラーム

では普通の人間では「~~も~~」と「~~人~~」の間に「~~と~~」を
 入れる「~~と~~」より、^{特別}神聖な人間だと
 するのを認めたい」に「~~も~~」は「~~人~~」の感度と知性
 が充分なものである。

感度と知性と「~~と~~」の場合、感度は知性にくら
 べれば劣る、と「~~も~~」とか、知性のほうが高尚であ
 るとかよく言われるが、イスラエルの場合は
 全く問題にはならない。普通の人間は五感と
 も、そして思^{（ズキ）}えぬ^{（ズキ）}から知性の
 知性をもつ。この六^{（ズキ）}はそれぞれその固有
 の機能をもつて「~~も~~」するわけであるが、コ
 ーラン中^{（ズキ）}の「~~も~~」の機能に^{（ズキ）}特別な記述は
 ない。従って、異なる機能を高くみ、或る機能を
 高めたものとして「~~も~~」するわけでは「~~も~~」ない
 である。以下上に少し述べたように、見ると「~~も~~」
 機能に対する愛着が強い「~~も~~」と「~~も~~」か、見ると
 は「~~も~~」か……であるのを見たいか!?!?が報
 出てくる。(見る = 分ると「~~も~~」の context
 もある)「~~も~~」の「~~も~~」の問題は微妙である。コ
 ーラン中に表われる諸感度、知性の記述は一つ

の重要な問題と存する)。

自然は人間にとって神を創用可能な素材
 にすぎない。そのほか、それは神の「エト」が居
 してゐるとしてそのものである。ユダヤ教やキ
 リスト教でも自然にその創造主たる神の栄光
 をみることとはあるであらう。しかしイ
 スラームに於けるほどしてはくくりに述べ
 られてゐるわけではなからぬ。逆にイスラームで
 は神の「エト」の存する場として自然が極めて
 強く主張されてゐる。ユダヤ・キリ
 スト教には神の「エト」としての術語もな
 してはくくりに述べられる。ユダヤ・キリス
 ト教に於ける人間 ⇒ 自然とその図式は人間
 が自然 ~~に働き~~ ^{に働き} かけて創用可能なことを示してゐ
 るが、それよりそのまゝの意味でイスラーム
 にもこの図式が当てはまる。そしてイスラーム
 にはこれに加えて自然の中に神の「エト」を認
 めてゐることも創用可能なものである。ま
 た自然は神の「エト」と人間に伝達可能なものと
 して人間に対して働きかけることもあつた。人間

も自然であつて、イスラームでは自然といふ
 ものの概念が能動的であり、ユダヤ・キリス
 ト教のそれの二とく受動的、静態的である。

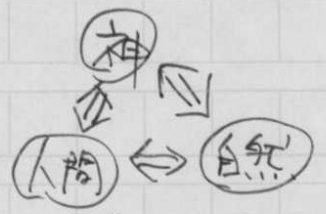
「天と地の間の木とゆきものはアッラーの
 ものである。アッラーのもとにあるものは全
 てアッラーを常時讃美してゐることがあり」
 (S.21.19) であつて、従つて「……空と
 んでゐる鳥もまた羽根を広げてアッラーを讃
 美してゐるものである……」(S.24.41)。鳥は

けではなく木影下を讃美してゐるといふこと。 (

⑧ S.)。アッラーを讃美するといふ
 活動は被造物にとつて本質的の存在といふこと
 であるから、従つて本質的には人間はとりた
 てて鳥や木影と異なつてはゐるものである。

自然と人間とを同列に置くことの考へ方はユダ
 ヤ教やキリスト教にはないイスラーム独自の
 ものである。同じ人間 ⇒ 自然といふ図式で
 もユダヤ・キリスト教のそれとイスラームの
 それとでは意味が違ふといふことをみつけた。人
 間も自然の一部であり、自然と並ぶべきもの

であつて、両者ともに神の「~~存在~~」をたててい
 る ~~存在~~ ~~と~~ ~~イ~~ ~~ス~~ ~~ラ~~ ~~ー~~ ~~の~~ ~~存在~~ ~~を~~ ~~た~~ ~~て~~ ~~て~~ ~~い~~ ~~ふ~~ ~~こ~~ ~~と~~ ~~が~~ ~~そ~~ ~~の~~ ~~相~~ ~~異~~ ~~点~~ ~~に~~
 ある。また、神の「~~存在~~」は自然を通し、のみ人
 間にとどくから自然の立場にたてば（自然も
 その ~~存在~~ ~~を~~ ~~た~~ ~~て~~ ~~て~~ ~~い~~ ~~ふ~~ ~~こ~~ ~~と~~ ~~が~~ ~~そ~~ ~~の~~ ~~相~~ ~~異~~ ~~点~~ ~~に~~
 神を證美する主体のたから。個々の自然
 物はその独自の固有の立場をもつ。何故なら
 神とその固有の仕方に於て證美するその主体
 のたから ~~（~~ ~~）~~ 人間への「~~存在~~」伝達者として（
 自然の個々の物が ~~それ~~ ~~を~~ ~~た~~ ~~た~~ ~~時~~ ~~存~~ ~~在~~ ~~仕~~ ~~方~~ ~~に~~ ~~於~~ ~~て~~ ~~伝~~ ~~達~~ ~~可~~ ~~し~~ ~~る~~ ~~）~~ 人間に働きかける（それそれ時存
 仕方に於て ~~（~~ ~~）~~ ~~に~~ ~~（~~ ~~）~~ ~~の~~ ~~図~~ ~~式~~ ~~は~~ ~~人~~ ~~間~~ ~~⇔~~
 自然とやるのからより正確なのであつて。こゝし
 て ~~（~~ ~~）~~ ~~は~~ ~~イ~~ ~~ス~~ ~~ラ~~ ~~ー~~ ~~の~~ ~~存在~~ ~~を~~ ~~た~~ ~~て~~ ~~て~~ ~~い~~ ~~ふ~~



と ~~（~~ ~~）~~ ~~の~~ ~~dynamic~~ ~~存~~ ~~在~~ ~~図~~ ~~式~~ ~~が~~ ~~成~~ ~~り~~ ~~立~~ ~~つ~~ ~~て~~ ~~い~~ ~~ふ~~ ~~こ~~ ~~と~~ ~~が~~ ~~分~~ ~~る~~ ~~の~~ ~~で~~ ~~あ~~ ~~る~~ ~~。~~

人間は自らの中にまた自らをとりまく諸環
 境の中に絶対者の「~~存在~~」を見出るのであつてこ
 れらのものから目を転じて ~~（~~ ~~）~~ ~~の~~ ~~（~~ ~~）~~ ~~に~~ ~~も~~

転ずるとは「^は」と「^は」のイスラーム
 の著しい態度である。これは可くさまイスラ
 ムの現実重視と結びつく。イスラームには
 キリスト教の修道院制度のようにはこの世との
 接触を絶つておく可う神への瞑想にふけるこ
 ういう制度はない。この世こそが大切な
 んである。この世にこそ、そしてこの世に代
 け人間への愛が存在してゐるのだから。こ
 の現世を大切にすると、その態度は別に快樂主
 義だとか享樂主義だと呼ばれてゐるわけでは
 ない。ただ、人間と人間、~~自分~~^今はこゝで生きて
 いる私と汝とが、^今はこゝのうちに、今こゝに私
 ととりまいてゐる自然の中に、私(人間)の
 求めるものの、私が必要とするものの、^{全て}が蔽されてゐるであつて
 それ以外のものの中に求める必要はないし
 且つ蔽されてはゐるのだと考へるのであ
 る。

キリスト教は多かれ少なかれ、神を今こゝ
 にある私と汝、私と汝ととりまいて自然の彼方
 に求めようとする傾向にある。現世と神の世

界は重なる、て「存」となる。

「...」両者の傾向の「か」か「み」て、イ
スラームでは現実、現実と狂「ま」つて現実
の「諸制度、諸科学が長足の進歩をとり、キ
リスト教^世界ではその逆であり、
一面そうであり、一面そうではない。産問の初
期の段階、

→未だ幼稚な段階にある物理学や化
学、医学に於ては現実への眼差しの熱さ^か ~~主~~

役を演^いじるよりむしろイスラーム圏の「か」リ
ードとして「か」、より高度な段階に存在すると逆転
されて今日に「か」つて「る」。

ヨーロッパ人のキリスト教は神を自然の外
に求めたが、このことは何もヨーロッパ人が
自然に関心を^い持たなかったことを意味する
。神ぬきでの自然、神による人間に利用
されるべくつくられた自然と、人間に役立て
る材料としてこれを処理するべくこれに向った
のである。イスラームでは神^の「み」を見出す
ために自然に向った、つまり神に出会うため
に自然に向った。これは大きな「か」である

。キリスト教がヨーロッパで確立されると
 僧侶階級が現世に於ても支配的地位に立ると
 した。現世のもので「宗教が現世を支配
 しようとするのは明らかに矛盾で、当然にも
~~現世の~~自然と人間から神をしの出そうとする
 動きがある」とした。以後ヨーロッパの歴史は人
 間と自然の世界（＝この世）から神をこの世へ
 と追放し、「わがや、かばさ」して、やれ
 せよと「世」したと「世」から「この世で人間のほ
 し」ままに「世」をやらせようとしたのである。キリス
 ト教の教義自体に現世からの離脱的要素があ
 るわけだが、僧侶が現世をも支配しようとした
 のが最もと無理であった。人間と絶対的の
 中心とするヨーロッパでは「神と人間が一つ
 家に同居できる」。この世では神が中心であ
 り、この世では人間が絶対的中心で居け
 ればならなかった。（この世に於てある神の
 人間化が行なわれる傾向にある）。別に因果
 関係では「世」の「世」、キリスト教の成立と「世」
 と自体、同時進行的にその要素として「世」

ロッパの人間中心主義が^{作用}~~作用~~してゐるからである。だから自然からの神の追放はユーロッパのキリスト教ではまさに行なわれべきとして行なわれたのである。

神を自然から追放し(と云ふことはより精確には自然と人間との関係には神は一切かかわりをもたぬと云ふこと)自然と人間が利用すべき材料とみはしてこれに立す向い。人間の欲望に役立てよと~~可なり~~のユーロッパの態度である。人間の欲望には果てが無く。

この欲望に役立てるための材料の研究は欲望が続く限りあり、従つて果てしなく^{研究}~~研究~~は続くであろうが、イスラームでは事情が異なる。

自然は人間の材料だけではない^{あり}の~~あり~~本

質的には人間と並んでアッラーを讃美する存在であり、その中にはアッラーの^心と云つており、人間をそれを通して神に奉告できたりする。つまり^心を探ればもうそれである。そこで探求はとまる。人間の欲望のために自然を研究してゐるのは^{あり}の~~あり~~だから

3. 現実的諸学の研究に於けるヨーロッパ人に
いふに逆転はその55に12生じ下とのと思
われる。